

早稲田大學東洋哲學會 第三十五回大會

〔日時〕 平成三十年六月九日（土曜日）午後一時十分より
〔會場〕 早稲田大學文學學術院 三十三號館三階 第一會議室

〈研究發表および講演要旨〉

【研究發表】

李陽冰の文字解釋 — 『說文解字繫傳』祛妄篇にみる

關 俊史

李陽冰は盛唐期にそれまで廢れていたとされる篆書を中興した人物として書法史上知られる。しかし、篆書を能くしたことにとどまらず、文字の解釋書である『說文解字』を「刊定」している。その李陽冰の佚文が徐鍇の『說文解字繫傳』祛妄篇に見える。これまでの研究では李陽冰の文字解釋は臆説によるもので、顧みるに値しないと捨象されてきたが、當時の小學の水準を知る上で李陽冰の解釋を考察する價值はあるはずである。そこで、本報告は李陽冰の文字解釋について『說文解字繫傳』祛妄篇より接近を試みようとするものである。

荀悅の人間觀

長谷川 隆一

後漢末期に生きた荀悅は、『漢紀』・『申鑒』という書物を著したことなどで高名である。彼の人間觀については、善惡は性の次元では判別できず、情の次元で判断できるため、性自體に善惡は存在しないと考えた、と見られている。ただし問題がないわけではない。『申鑒』には性に善惡が存在するかのような記述があり、また上の見解では性三品説が成り立ち得るのか、という疑問が生ずる。以上のことから、本報告ではまず彼の人間觀について明らかにし、それを基底とした上で政治論等と如何に結びつくのか、ということについて言及したい。

聖罔・聖聰における體用關係の形成について

佐伯 憲洋

淨土宗鎮西派では、唯心淨土・西方淨土の關係を實體・化用の二語により説いている。先行研究によれば、この二語は了譽聖罔・西譽聖聰らによつて初めて用いられたとし、その實體とは色塵を離れた理境のことで、化用はその實體より派生した方便であるという。この二語が創設されたことは、西方淨土という事境だけでなく、理境をも取り入れることに繋がり非常に興味深いものである。しかしながら、依然これら二語が成立されるに至った経緯については明らかにされていない。そこで、その成立の経緯について考えていきたい。

『シローカヴァールティカ』普遍章に見られる他學派説

野武 美彌子

インド思想において普遍とは、諸個物に共通して存在しているとされるものである。普遍は、ヴェーダ聖典の研究に端を發する諸學派において、言葉の表示對象に關する議論の中で古くから言及されてきた。しかし普遍の性質について詳しく論じられるようになったのは比較的後代のことである。ミーマンサー學派のクマールラ (ca. 7c) による議論は、そのような時代の議論を知る上で貴重な資料となっている。本發表においては、彼の『シローカヴァールティカ』普遍章を取り上げ、彼がいかなる異論に對峙していたのか検討する。

孫思邈の醫學思想 — 道教思想の脈絡において —

館野 正美

隋唐の道士にして醫家たる孫思邈の醫學思想は、その名前の知名度に反して、論究されていない。そこで以下、この孫思邈の醫學思想について、些かなりとも従來の缺を補つてみたいと考える。

管見の結果、孫思邈の醫學思想の要訣は、單なる理論でもなく、また單なる小手先の醫術でもない、醫學・醫術の“極意”を體得するところにあつたと考えられる。彼自身、若い頃から〈意專思存〉（『備急千金要方』卷28、「調氣第五」と言われる、“修行”に勵み、その結果、醫術の“極意”を體得していたのである。

【講 演】

『般若心經』とアヴァローキテーシュヴァラ（觀世音／觀世自在）

齋藤 明

本發表では、これまでの關連研究をふまえた上で、『般若心經』とアヴァローキテーシュヴァラ（觀世音／觀世自在）との關わりを2つのポイントから考察する。1つは、同經の説主であるアヴァローキテーシュヴァラと「深遠な現れ」という名の瞑想（三昧）に入ったブツダとの關係。第2は、ルートが不明とされてきた、小本冒頭部と梵天勸請説話との關係である。これとともに、アヴァローキテーシュヴァラの名稱の由來、ならびに『般若心經』小本冒頭部とも關連する、ブツダによる「觀世」(oka-avalokana)の傳承に論及し、考察をくわえたい。